
とあるピカチュウの不殺録

疾風のへたれ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とあるピカチュウの不殺録

【Nコード】

N8243T

【作者名】

疾風のへたれ

【あらすじ】

いくつもある平行世界^{パラレルワールド}

その世界の一つに一匹のピカチュウがいた・・・

この小説は一応ポケモンの二次創作です。

駄文、処女作、これポケモンでやる必要あるの？、主人公無駄に

チート、独自設定というよりは勝手考えた世界設定、更新気まぐれ、等の成分があります。

それでも構わないという人は、このまま進んでください。

それ以外の人はブラウザの戻るボタンを押して下さい。

プロローグ（前書き）

初めての投稿ツス

駄文ですが、楽しく読んでもらえたら嬉しいツス

プロローグ

とある森の中、一匹のピカチュウが何やら旅の準備らしきことをしていた……

????「よし、準備完了。じゃあ一応親に声かけてから行くつもりか」

ピカチュウは荷物を持って親の所へかけて行った。

????「じゃ、母さん俺は旅に出るから」

母「あら、もう行くのかい。ピカ、そのうち顔を見せに帰って来な」

ピカ「あいよ、ピチュにも旅に出たこと言っといってくれ」

????「ピカ、もう行くのか?せめてピチュが大きくなってからでも遅くは無いだろうに」

ピカ「くそ親父も来てたのか。って言うか、てめえがうざったいからさつさと家を出ようと思ったんだよ」

父「うう、母さん息子が冷たいよう」

母「はいはい、あんたがそんなだから息子に嫌われるんだよ。ピ

カさつさと行っておいで。父さんはちゃんと黙らせておくから」

ピカ「おう、じゃあ改めて、行ってくるな」

こうしてピカの旅は始まったのである。

プロローグ（後書き）

うん、ぐだぐだッスね。

もっとマシになって行ったらいいんすけど。

感想、どっいつ感じ書いたらいいかなど待ってるッス

キャラクター説明（前書き）

キャラクター説明ツス。

また新しい主要なキャラが出てきたら書き加えるつもりツス。

キャラクター説明

・ピカ

種族 ピカチュウ

見た目 緑のバンダナを頭に巻き、両腰に短刀一本ずつ、左腰に太刀を一本付けているピカチュウ。大きさは普通のピカチュウより一回り小さい

解説 自分が正しいと思ったことをするピカチュウ。実は超絶甘党で、いつもお菓子の消費量がハンパなくこずかいの大半は菓子代に消えているとか。

フルネームは「ピカ・Bゾネス」

・母

種族 ライチユウ

見た目 普通のライチュウを一回り大きくした感じ

解説 ピカの母親。ちなみにフルネームは「ライ・ゾネス」 昔ブ

ロレスラーで苗字はその時のもの。二児の母。

・父

種族 ピカチュウ

見た目 左腰に刀を付けているピカチュウ

解説 ピカの父親。ちなみにこちらも名前は「ピカ」 飲ん兵衛で酔っ払っては息子と娘を構おうとするから、子供達には嫌われている。そんな情けない父親だが、ピカに刀の基本を教えたのはこいつ。

・デン

種族 デンリュウ

見た目 普通のデンリュウより二回りほど大きい

解説 基本的に旅をしているデンリュウ。ちなみに苦勞人。

お人よしな所があるが、ピカとは違い敵は躊躇無く消せる。
過去に何か有り(笑)

・ドン

種族 ヒトカゲ

見た目 顔にでっかいさんま傷が有るヒトカゲ。

解説 顔の傷のおかげで見た目はいかついが、わりと気さくなヒトカゲ。

ちなみに武器は腕に備え付けるタイプのトンファー。知っている人は、ゴドラタンのビームトンファーみたいなのを想像してもらったらいい。

・ヒノ

種族 ヒノアラシ

見た目 槍を持ったヒノアラシ

解説 基本的に無口、喋ったとしても一言か二言。でも何かリアクションを取らせないと空気に。

戦い方は、スピードで圧倒するタイプ。

・チャモ

種族 アチャモ ワカシャモ

見た目 普通のアチャモより一回り大きい 普通のワカシャモとなんら変わり無し。

解説 実は半分ノリで出したキャラ。だから設定もあまり決まっていなかったりする。

・マリ

種族 マリル

見た目 なんかどSオーラが出ているマリル。

解説 デンの幼馴染。デンの運命はこいつに会った時から「諦める」

としか言えないものに。プリニーよりひどい環境で働かせる悪魔。

・ピチュ

種族 ピチュ

見た目 普通のピチュより一回り小さい

解説 プロローグに名前だけでできたピカの妹。かなり幼いはずなのだが、あまりそんな感じがしない。

今の名前は仮なので、名前募集中。

・キリ

種族 人間

見た目 FR、LGのミニスカートと女主人公を足した感じ。

解説 初めての人間キャラ、基本的にかわいいものが好き。あと巨乳。結局名前は自分で決めるハメになりました。

・汐

種族 ミュウ

見た目 普通のミュウ

解説 キリの手持ち？基本的に丁寧なしゃべり方で多分この作品内で一番のお人よし。チート具合はピカ並み。

名前の由来は、ミュウ 反対にしてユをとる ウミ 海 じゃあ汐で。

・サラ

種族 人間

見た目 赤髪蒼目でセミロングな少女。

解説 自称”天才”魔法使い。本当に才能はあるんですけどね。とりあえず異世界編でのピカの保護者。

キャラクター説明（後書き）

作「次回からあとがきは、キャラクターにたいする質問が来たら、ピカと一緒に答えて行く予定です！」

ピカ「というわけで質問待ってるからな〜
荒らしはお断りだけど」

一話（前書き）

毎度のことながら短いッス。

一話

旅の道中とある話を聞いた。

「この近くの村でならずものの集団が居座っているんだとよ。」

ピカ「へー、そうなのか」

「ああ、数も多いし、強い奴もけっこういるみたいだから、村のポケモンも追い出せないらしい。悪いことは言わないから、その村には近付かないほうがいい。」

ピカ「まあ、面白い話ありがとよ。」

「はあ、もしかしてお前さん。」

ピカ「縁があつたらまた会おうや。」

ハハハと笑いながらピカは、ならずものが居座っているという村に向かった。

ピカ「ここか」

村を見渡すと何処か寂れている雰囲気がある。

ピカ「まあ、ならずものとかがいる場所といえば酒場って言うのが定石だろうな、あればの話だか。」

そういつて酒場の位置を探し始める。

ピカ「ここかな。」

カランコロンと音を立て店に入ると、何やらがらの悪い奴らがこちらに目を向けてくる。

それを無視してカウンターに座り。

ピカ「マスター、ミルクを蜂蜜シロップ5杯入りで。」

それを聞いたがらの悪い奴らが

「そんなん飲んだら胸やけで瀕死状態になっちまうぜ。」

「酒が飲めないようなガキが酒場に来たってか。」
などとゲラゲラ下品な笑いをする。

ピカ「ふーん、とくに何もせず真昼間から酒をかつくらっているよ
うな奴らよりマシだと思っけどね。」

「んだと、このクソガキが、喧嘩売ってんのか」

ピカ「ただの正論だと思うけど。」

「このクソガキが、ボコボコにしてやる。」

と、ならずものが手をだそうとしたとき

「まあ、ガキの言うことだ。そんなに怒るな。」

と一匹のポケモンがいさめた。

「ですが親分。」

「てめえは、俺の言うことに文句有るってのか？」

「いえ、そんなことはありません。」

親分と呼ばれたポケモンはか「そうか」と言ってからピカを見た。

「おう坊主、名前は。」

ピカ「自分から先に名乗るのが礼儀じゃないのか。」

「ここいらで俺にそんなこと言うのはお前が初めてだ坊主、気に入った。俺はこのグループのリーダーをやっているバンギラスだ。どうだ坊主このグループに入らないか？」

ピカ「嫌だね」

「ほう、何故だ。」

ピカ「てめえらみたいに他人を見下すような奴らは、好きじゃなくてな。」

「ほう、そうか、てめえみてえにここまで俺に喧嘩吹っかけて来る奴は初めてだ。わかった表に出る。誰に喧嘩売ったのか解らせてやらあ。」

ピカ「めんどくさいしまとめてかかって来ていいよ。」

「へっ、吠えずらかかせてやる。」

そしてピカの暇つぶしは始まった。

二話（前書き）

一応戦闘回ツス。にしても戦闘描写はへた、最後の方ぐだぐだ、やっぱりかなり短いと良いとこ無いツス。
どうすればうまく書けるツスカ、誰か教えてほしいツス。

二話

ピカは完全に敵をおちよくっていた。

敵の攻撃をかわし、敵と敵を同士討ちの状態にし、たまに敵に足払いをしかけ転ばせる。

武器どころか電撃も使ってすらいないのだ。

そんなこんなで避ける、転ばせるだけであっさりと敵をあらかたかたずけてしまったのである。

ピカ「で、残りは大将でめえだけだな。」

「てめえ俺の子分をこつもあっさりと。」

ピカ「強い奴もそこそこいるって言うからやって来てみたら、てんで弱い奴らばかりで欠伸が出る。てめえは少しはマシなのか？」

と少しだるそうな顔をしながらも、バチバチと電気を出しながら威嚇をしている。

「このクソガキが、子分と俺とを一緒にしてもらっては困るな。」

バンギラスはそういいながら【砂嵐】を引き起こした。

ピカ（ちっ、長引かせて損するのはこっちだな）

ピカは太刀に手をかけてバンギラスに向かって走って行く。だが、

「この技でおわりにしてやるよ。」

バンギラスは【地震】をはなつ。

ピカは空中に跳んで逃げるが、
「いいのだなあ」

バンギラスはピカ目掛けて拳をはなつ、だが、

バチッ

タイミングよく尻尾を相手の拳に当て電気を流し攻撃を弾く、そ

して

ピカ「くらえ、これが俺の紅い一撃（レッドフレイム）だ。」

どこかで聞いたことがあるような台詞を叫びながら

一線、ピカは攻撃をしバンギラスの足元に移動していた。「けっこうきいたが、俺を一撃で倒せるほどの威力は無いみたいだな。このまま踏み潰してやる。」

と足を上げた瞬間。

パチツという音が鳴り、ズドーンという音をたててバンギラスは倒れた。

「何をしゃがった。」

ピカ「ただずっと【電磁波】をだして、てめえを少しきつめの麻痺状態にしただけさ。」

「いつからだ。」

ピカ「教えると思う?」

「・・・へっ、俺の負けだよ煮るなり焼くなり好きにすりゃあいい。」

ピカ「べつにどうするきも無いよ。ただ・・・『グ』腹減ったから飯おごってくれ。」

「そんなんでいいのか?」

ピカ「べつに、元はといえばただ暇つぶしに喧嘩売っただけだからな。」

「このクソガキが」

ピカ「で、実際挑発に乗って負けたのはそっちだろ。」

「分かったよ、飯おごってやるからどっか行ってくれ。・・・俺はこんな奴に負けたのか。」

このあとバンギラスの財布の中身は空になったそうなの。

三話（前書き）

なんか、会話になると、地の文が無くなるッス。

三話

ピカ「腹減った」

前に立ち寄った村から1週間後、保存食も無くなり早くどこか村か町に行かなければ、餓死してしまうかもしれないという状況になっていた。

実際は、狩りか釣りをして食料を手に入ればいいのだが、実はピカ料理が全く出来ないのである。

基本的に生の物を食べると中に寄生虫が居たりするのでしっかりと火を通さないといけない。

ただピカの場合は食べ物に火を通す、たったこれだけで何故かそんじよそこらの毒薬よりやばい暗黒物質ダイクマターが完成するのである。もはやこれは一種の才能である。

そんな全く役に立たない才能のおかげで死にかけているという、もはや笑い事にしかならないのである。

さらに三日後、

ピカ「・・・」
もはや言葉を出す気にもなれない状態にまでなっていた。目は虚で焦点もあっていない。

さらに数時間後、

ピカ「・・・やった！村が見えてきた。」
最期の力を振り絞るかのように走り出し、村の入口の所で、

ピカ「もう無理」

走ったつげか、ドサツと音を立てピカは倒れた。

倒れたピカの所に一匹のポケモンが近づいて来て、

「村のポケモンじゃないみたいだけど、倒れてる見たいだし家に連れて行こうかな。」

とピカを引きずって行った。

ピカ「・・・ん？何か飯の匂いがするな。」

ピカが目を覚まし匂いの方へ進むと、

「あつ、ピカチュウのお兄ちゃん起きたんだ。もうすぐご飯出来るけど食べる？」

ピカ「悪いな、飯は食わせて貰う。にしてもこのどいつともわからない奴をよく家に入れたな。」

「それはね、独りじゃ淋しかったから・・・。ご飯出来たよ。」

ピカ「ああ、ありがとう、って親はどうした。お前まだまだ子供だろ。」

「わかんない。森に遊びに行つて帰つて来たら、お母さんも、お父さんも、村のみんなも居なくなつていたの。」

ピカ「そうか・・・。そーいや自己紹介してなかったな。俺はピカだ、嬢ちゃんの名前は？」

「私はロコンだよ。ピカお兄ちゃんはいつまでここに居てくれるの？」

ピカ「うーん・・・ロコンが森に行ったのはいつだ？」

「えっ、え〜と・・・三日前だったよ。こんなこと聞いてどうするの？」

ピカ「……これだけじゃ情報が少な過ぎるな。まずこの村から調べて行くか……」

「お兄ちゃんどうしたの？」

ピカ「ん？考え事をな。まあ、飯の礼だ。この村のみんなを捜してやるよ。」

「えっ、居なくなったりしない？」

ピカ「大丈夫だよ、俺は居なくなったりしないよ。というか何でそんな俺に懐いてるんだ？」

「だって、お父さんもお母さんも居なくなっって、淋しかったんだもん。それに優しそうだったし。」

ピカ「安心しろ、ちゃんとみんな見つけ出して帰ってくるよ。」

「約束してくれる？」

ピカ「ああ、約束するよ。（なんか、妹がもう一人出来たみたいだな。こっちは淋しがり屋で、向こっちはお転婆だけど）」

ピカはどうでもいい事を少し考えながら調査に向かった。

三話（後書き）

なんか、ロコンがヒロインやっているような気がするッス。

四話（前書き）

ぐだぐだだし、難産だったッス。

四話

ピカ「ここかね」

いろいろと調査して村のポケモンがいると思われる所（遺跡）に着いた。ぶつちやけ、足跡探索以外あまり役に立たなかつたが。

ピカ「にしても、こんなところに籠ってなにしてるんだろうな、犯人さんは。」

遺跡の奥からは明らかに普通とは違う空気がする。まるで伝説級のポケモンが居そうな感じである。

ピカ「まっ、村のポケモン助けて帰るだけだろ。奥に居る奴が何考えてるか知らないが。」

ピカはそういいながら遺跡に入って行く。

遺跡の奥に倒れているポケモンがいる。

ピカ「大丈夫か!？」

だがポケモンから返事は無い。

ピカ「息は・・・してるみたいだな」

生きていることにホッとしそして

ピカ「水を飲ませてやるから、待ってる。」

水筒を取り出しポケモンにゆっくりと少しずつ飲ませて行く。

「あんたは？」

ピカ「俺はあんた等を助けに来たんだ。」

「そうか、・・・一体誰が。」

ピカ「この近くの村に、子供のロコンがいるだろ、その子に助けて貰った礼の代わりだ。」

「そうか、この先には行かないほうがいい。見たことも無い奴が居

る。そいつの目を盗んでなんとか逃げ出したが、あいつはやばい悪いことは言わないから逃げたほうがいい。」

ピカ「そいつのところ、村のポケモンが居るのか？」

「おい、まさか。」ピカ「ロコンに『村のみんなを捜してやる』って言ったんだよ。捜すだけ捜して『危険な所に居ます』じゃ、意味が無いだろ。それに俺はそう簡単に死なないよ。」

「・・・わかった、でも無茶だけはするなよ。」

ピカは「わかった」とだけ言って遺跡の最奥部に向かった。

遺跡最奥部

ピカ「見つけた。」

村のポケモンが捕まっている部屋を発見した。

ピカ「にしても、なんでこんなことをする必要があるんだろうな。」

部屋の鍵を開けながら呟く。

「それは、我が目覚めたばかりで大量のエネルギーを必要としているからだ。」

不意に後ろから声がする。

ピカ「てめえは」

「我はここで眠っていたポケモンだ。おぬしもいい生命エネルギーを持っているな。」

ピカ「生命エネルギーって。」

「我は大量のエネルギーを必要としていると言ったであろう。このポケモン達から生命エネルギーをすべて貰おうと言っただ。」

ピカ「つまり全員殺そうって言っただのか。」

「否、神と呼ばれたポケモンの一部になるのだ。光栄であろう。」

ピカ「あいにく俺は無神論者でね。てめえなんかの為に殺されてや

る訳にはいかねえよ。」

「我に抗おうと言うのか、愚かな。その行為、無駄だと知れ。」
ピカ「てめえみたいな、荒んだ心の奴に武器は危険なんだよ！」

神と呼ばれたポケモンとの戦いが今始まる。

四話（後書き）

なんかポケモンから掛け離れて来ている気がするッス。
あと感想とかよろしくお願いしますッス。

五話（前書き）

PV1000

ユニーク300突破ツス。

この小説読んでくれる人ありがとうツス。

五話

ピカは防戦一方だった。

元から種族的にぺらぺらの紙耐久なので、一撃くらったらおしまいなのである。

だから相手の隙を突き、一撃くらわせる。それで相手が倒せなかつたら、すぐに離れる。基本的にヒット&アウェイの繰り返しなのである。

だが今は隙があつても、攻撃できる余裕が無い。敵の攻撃が強力過ぎて回避に専念しなければ、攻撃の余波だけでこちらが吹き飛ばされるのだ。

隙を作ろうと【電磁波】を放ち続けているが、全く効いているようなそぶりは見せない。

ピカ(どうなってるんだ、【電磁波】が効いてるような感じはしないし、こちらの行動も制限されて来ている。相手の能力を見極めないと。)

とりあえず【電撃波】を放つてみると、敵に当たる前に拡散していった。

ピカ(これは【光の壁】なんかじゃ無いな、もっと別の何かだ。)

【光の壁】なら拡散はしても敵に当たる筈である。だが完全に【電撃波】は拡散しきって敵に当たらなかつた。

「我の力に驚いているようだな。時を渡れる者がいるように、我は力を操れる。今はまだ完全には使いこなすことは出来ぬがな。」

敵が喋っている内にピカは敵に近く。

ピカ「べらべらと御託ありがとよ、おかげで隙だらけだったぜ。」

太刀に雷を纏わせて攻撃するが、

バキ

太刀が折れ敵にはダメージをあまり与えられなかった。

ピカ（なっ、途中で剣速が遅くなったと思ったら、当たった瞬間太刀の横方向から衝撃が来た。そんな芸当もできんのかよ。）

「これで終わらせるとしようか。」

攻撃を放つ。ピカも回避行動をとるが

ピカ（やべえ、間に合わない。）

ドーン

大きな音を立て、砂煙りも立ち上る。

「ただのピカチュウにしては良くもったほうだ。あの世で誇るがい。」

敵が立ち去ろうと後ろを向くと

ザシユ

敵の背中に切り傷が入った。

ピカ「まだ、終わってねえぞ。」

ピカはボロボロだが、まだ立っていた。

「我に傷を。・・・ククク、ハーハツハツハツ。よくもやってくれたな、いけにえ共も消えてしまいがしかたない。全力で消してやるう。」

敵は強大な攻撃を放とうとするが、

ピカ「させるか！」

ピカは短刀二本に全力で雷を纏わせ切る。

「ぐはっ。」

敵は倒れ、短刀二本も崩れさる。

「我はこのていどでは死なぬ。いくらでも起き上がりおぬしを消しに行くぞ。」

ピカ「殺しはしねえが、ずっとおとなしくしてやがれ。」

そう言つと、ピカの手が光り、何かを盗んだように思えた。

「何をした。ぐふつ。」

ピカ「俺だって知らねえよ。」

敵は倒れ、ピカは

ピカ「村のポケモンを助けないと。」

村のポケモンが捕まっている部屋の扉を開け、そのまま倒れた。

五話（後書き）

にしても、本当にポケモンから掛け離れて来ているッスね

六話（前書き）

やっぱりぐだぐだッス

六話

ピカは夢を見ていた。

まだ、自分の種族がピチューだったとき、自分が欲しいと思った物をいつの間にか手に持っていたときの事を・・・

ピカ（そっぴや、こんな事もあったな）。このあと怖くなって元の場所に戻したっけ。）

案外へたれである。

ピカ（にしても、なんでこんな夢を見るんだ？そっぴや、神（笑）をぶちのめしたときなんか言ってたな、それに関係あんのかね。）
そんなことを考えながら目を覚ます。

ピカ「・・・夢か。そっぴやここは。」

周りを見渡してみると、見たことがある部屋だった。具体的に言う
とロコンの家。

ピカ「にしても誰がここまで運んでくれたんだ。」

ギイ

扉が開く音がし、その方向を見ると、

ピカ「よっ、ロゴン。」

「ピカお兄ちゃん起きたんだ。」

ロコンは半分泣きながらピカに飛びついて来る。

そして・・・

ピカ「ぐふっ。」

ロコンのたいあたり。

かいしんのいちげき。

ピカはたおれた。

「えっ、お兄ちゃん？ピカお兄ちゃん、どうしてまた寝るの？目を覚ましてよ。ピカお兄ちゃん・・・」

ロコンの悲痛な叫びが響き渡る。

数時間後

ピカ「はっ、三途の川が見えた。」

「お兄ちゃん、大丈夫？もう大丈夫だよな？」

ピカ「ああ、大丈夫だからそろそろ落ち着け。」

ピカは口から魂を出しながら、ロコンをなだめる。

ピカ「にしても、誰がここまで運んでくれたんだ？」

「それはね・・・」

そこでまた別のポケモンが入って来た。

「ようやく目を覚ましたか。」

ピカ「あんたは・・・誰だっけ？」

「遺跡の所で倒れていたポケモンだ（四話参照）」

ピカ「・・・ああ、そんな奴もいたような気が。」

「完全に忘れてるな。」

ピカ「まあいいや、あんたがここまで運んでくれたのか？」

「ああ、すごい音がして心配だから見に行ったら、お前が倒れていたらって訳だ。あと村のポケモンも全員いるから、安心しろ。」

ピカ「そうか。なら俺はこの村を出させて貰うとしますか。」

「村のポケモン全員で、お前の歓迎会しようとしているから、それは無理だぞ。」

ピカ「へっ？なんで？」

「それは、助けてくれた奴に感謝するのは当たり前だろう。」

ピカ「そうじゃなくて、なんでもう村のポケモン起きてるの？」

「ピカお兄ちゃん一週間ぐらいつと寝てたんだよ。あつ、私歓迎会の準備行ってくるね。」

ロコンは部屋を出て行く。

ピカ「いつてら。・・・ってマジかよ。」

「あれだけ、ボロボロで生きているほうがすごいと思うが。」

ピカ「噂になるの嫌だから、早めに出て行こうと考えてたのに。」

ロコンが戻って来て、

「歓迎会の用意できたから呼びに来たよ。」

ピカはため息をついてから、しかたなく歓迎会に向かった。

歓迎会が始まって時間が経ったころ。

ピカ「もはや、お祭り騒ぎだな。」

ピカは少し離れた所で食べていた。

それに気づいたロコンがやって来て

「みんなと一緒に食べないの？」

ピカ「少し一人でのんびりしたかったんだよ。」

「そうなの？」

「そうなんだよ。・・・さてと、先に保存食も貰ったことだし、俺は村を出させて貰うわ。」

「歓迎会の最中なの？」

ピカ「ああ、同じ所に長く居たら出にくくなるからな。村のポケモンにはロコンから言っといてくれ。」

「また来てくれる？」

ピカ「いつになるか分からないけど、そのうちな。」

「約束だよ。」

ピカ「ああ、わかったよ。じゃあな。」

そしてピカはまた旅に出た。

七話（前書き）

ほとんど説明回ッス。
あといつにもまして短いッス。

七話

なぜか様々なものを知覚出来るようになった。

重力等、比較的わかりやすいものから、相手の残りのスタミナ等、なんでも本人でないとわかるかボケなものまで、手に取るようになるようになってしまった。

それどころか、そこらへんの力のエネルギーや向きを操れるようになってしまった。

これをわかりやすく例えるなら、ボールを投げると失速していくように見えるが、他のエネルギーに変わっているだけで、元の合計エネルギーは同じなのである。

その、他のエネルギーに変わるはずのエネルギーすべてを、ボールが前に進むエネルギーにすると、ずっと前に飛んで行くボールが出来る。

他にも、ボールが飛んで行く向きを変えて、急に直角に曲がるボールにすることも出来る。

やろうとすれば、他人の寿命を盗って自分のものにする事も出来るだろう。・・・確かめた事は無いしやる気もないが。

あとは、0から1に1から0にすることは出来ない。

これは、動いていないものをなんのエネルギーを加えず動かすことは出来ないし、時速10Kmで動いているものをなんの制限もなく時速20Kmにすることは出来ないのである。

何故ここまで詳しくわかっているかと言うと、

ピカ「なんで、こんなに喧嘩売られるんだよ。」

周りには屍の山（殺して無いけど）が築き上げられていた。

ピカ「にしても、喧嘩売られたおかげでなんか使えるようになった

力はわかったけど、武器が無いとやっぱ戦い難いな。」

この前武器を失ってから、まだ新しい武器を手に入れていないのだ。

ぶつちやけ武器を使うポケモンなんてそういないので、あまり手に入らないのである。

ピカ「どっかにちょうどいいのなかね、とくに短刀。」

そういや、どこかのダンジョンにはお宝が大量に落ちてるって話だったな。そこに行けば武器もあるかもしれないし路銀も心許なくなってきたから、ちよっくら探しに行くか。」

ピカの旅の目標はとりあえずダンジョンで武器を手に入れることに決まった。

七話（後書き）

部活が忙しくなりそうなので更新が遅くなるかもしれないツス。
元から気まぐれ更新ツスけど、でもそのまま更新しなくなるとい
う状況にならないようにはするツス。

八話（前書き）

や、やっと書けたッス。

八話

ピカ「ようやくか。」

ピカはダンジョンの最深層にたどり着いていた。ただ潜ったダンジョンが不思議なダンジョンだったため最深層まで来たのだが。

その最深層まで来るのにモンスターハウスが大量にあり、おまけに大半の敵が【スピードスター】等の技を使ってきたため、それなりにきつかったのである。

まあ、間に合わせの武器は手に入れたのだが。

ピカ「さて、次は何があるんだ。何も無いとか言われたら俺はキレる。」

ピカが次の階の階段を下りると、

「シンニューウシャハツケン、ハイジョシマス。」

そんな無機質な声が三つ聞こえてきた。

ピカ「レジ系三体同時とか、普通だったら過剰防衛にもほどがあるぞ。」

ピカの目の前に居たのは、レジロック、レジアイス、レジスチルの三体だった。

元からレジ系のポケモンは何かを守る為に造られたポケモンで、中には長い年月の中自我に目覚めた者もいるが、ほとんどは今回のように命令を守り行動するだけの存在なのである。

ピカは雷を纏わせてレジロックに切り掛かるが、レジアイスの【冷凍ビーム】でそれを阻止される。

ピカ（一体に集中しようとするれば他の奴に阻止される。こいつら連携が取れてやがる。まとめて攻撃できる技もあるが威力分散するし・・・）

ピカは苦戦していた。

一体を早くかたづけようとするれば、それを阻止され。

広範囲攻撃はあまり威力がでない。

八方塞がりというわけでは無いがめんどくさい状況になっていた。

ピカ（威力を分散させずに攻撃を出せばいいんだけどな・・・。そっぴやファンネルみたいなオールレンジ攻撃が出来るか試してみるか。）

ピカは意識を集中し始めた。

基本的に初めてやることは、そのことに集中する必要があるし、成功する確率は低いのである。おまけにほかの事に意識があまり回らないから、攻撃もくらいやすい。

つまりピカは相当部の悪い賭けに出てみたのである。

レジ系の猛攻が続く、ピカもなんとか紙一重で避けているが、段々じり貧になっていく。

そしてピカのバンダナがボロボロになって吹き飛ばされたとき。

ピカ「できた。」

レジロックの周りに無数の雷の槍ができ、その雷の槍で一斉に攻撃する。

ピカ「まず一体。一回できたら応用含めてなんとかなるな。バンダナの礼させてもらうぞ。」

そしてレジアイス、レジスチルに炎の槍で攻撃する。

ズズーン

そしてレジ系三体を倒した。

ピカ「ハア〜。バンダナが無いとなんか絞まりが無いんだよな。新しく買うしか無いか。」

ピカが溜息をつきながら、最奥の間に向かうと、

ピカ「奥のお室は何かなつと。……って俺が使ってたバンダナと同じ感じのかよ。」

ピカが使っていたバンダナと、色までもが同じなバンダナを見つけた。

ピカ「しゃあないから、これ使うか。」

見つけたバンダナを頭に巻き、帽子を被るように少し強く引っ張

ると、

ピカ「!!!?」

ピカの頭がバンダナの中に消えた。

ピカ「物を入れられそうな形になると、四次元ポケットみたいになるのかよ。まあ、荷物を大量に持てるからいいけど。」

ピカは無限バンダナを手に入れた。

八話（後書き）

なんか、わりとネタが出てきてるッスね。

九話（前書き）

キャラクター説明も更新したッス

九話

ピカ「金が無くなった。」

ピカは金欠になっていた。

無限バンダナを手に入れ、荷物を大量に持てると調子に乗って、お菓子やらゲーム機やら大量に買物をしたため金欠になったのである。

ピカ「じゃあないから、仕事探すか。」

ピカは仕事をする事にした。

この世界には冒険者という便利屋がいる。

迷子探しから、貴重なアイテムの探索、中にはならずもの等を倒すという事もする。

そんな事を冒険者に依頼する掲示板が町には一つはある。

掲示板前

ピカ「西にできた洞窟の調査を頼みます。」か、この依頼をする
としますか。」

ピカが依頼の紙をジャンプして取ろうとした時、
???「この依頼にしようかな。でも一人じゃ心許ないから仲間を
募ってみようかな。」

一匹のデンリュウが先に依頼の紙を取っていた。

ピカ「それ、俺が受けようとした依頼。」

「???」「ん？ああ、ごめんそれは知らなかったよ。そうだ、この依頼僕も一緒に連れて行ってよ。」

ピカ「ん、報酬の分け前は6：4なら。」

デンリュウは少し考えてから

「???」「わかった。それで手を打とう。僕の名前はデン君の名前は？」

ピカ「ピカだ。よろしく。」

デン「よろしく。」

デンが仲間になった。

西の洞窟に行く道中

ピカ「もう夕暮れ時だし、今日は休まないか？」

デン「ちよつと早いような気がするけど、分かったよ。じゃあ僕は、なんか食料を調達してくるね。」

ピカ「おう、行ってら。・・・って料理できるのか？」

デン「うん。保存食ばかりだと味気無いしお金もかかると思っけど・・・」

ピカ「どう足掻いても、ダークマター暗黒物質しか作れないんだが。」

デン「うん、なんかごめん。・・・食料調達してくるね。」

デンは食料調達に行き。ピカは野営の準備を始めた。

デンが食料を調達し、料理を終え、食事中

ピカ「うま、飲食店開いたほうがいいんじゃないか？どうやってこ

「ここまで上手くなったんだ？」　するとデンの表情がいきなり暗くなり
デン「日頃から色々とき使われたらね・・・」
ピカ「悪い。聞いたらダメなことだったか。」

ちなみにデンはしばらくその状態だったという。

十話（前書き）

PV3000、もうすぐユニーク700突破ッス。
読んでくれている人、本当にありがとうッス。

十話

デン「だいたい調査は終わったかな。」

ピカ「ここも、不思議なダンジョンかよ。」

入ったら消えてしまった入口、下りたら無くなる階段。

西の洞窟（仮）は不思議なダンジョンだった。

デン「あと、出てくる敵もけっこう強いから、強いポケモン以外は絶対入らないほうがいいね。」

ピカ「ああ、あとかなり深いしな。・・・というか不思議なダンジョンって、こうポンポンとできる物なのか？」

デン「さあ、一応土地にもよるけど、強いポケモンが長くその場所にいるとできやすいらしいけど。」

ピカ「で、住み着くポケモンの強さは、そのポケモンの強さに比例する。」

デン「知ってるじゃないか。」

ピカ「『知ってるじゃないか』じゃねえ、なんで俺含めて二匹とも、ダンジョンから脱出する【穴抜けの紐】持って来て無いんだよ。」

ピカとデン二匹ともダンジョンから脱出できるアイテム【穴抜けの紐】を持って来ていなかった。はつきり言っただけである。

デン「こっちもお金が無かったんだよ、しかたないじゃないか。」

ピカ「けっこう敵が強いダンジョンだ、この主はそれなりに強いことになるぞ。」

デン「大丈夫だと思うよ。今まで危なげなく進めているし。」

ピカ「そうだけども、依頼早く終わらせたいじゃないか。」

デン「それも分かるけど、ダンジョンに落ちてるアイテムとか売っ

て路銀作らないの？」

ピカ「ダンジョンに落ちてるアイテムは、売って金になるやつは体外使えるやつだし、いらぬやつは体外売っても金にならないから……」

ピカ達はそんな会話をしながら奥に進んで行った。

ピカ「ここが最下層かねっと……」

そういいながら階段を下りた途端何かが飛んで来た。

ピカ「危ねえな、くらってたらかなりやばかったぞ。」

「ふむ。避けたか今度の敵は少しは骨があるようだな。」

奥の広間から白いポケモンが出てきた。

デン「こんなポケモン見たこと無いけど、ピカは知ってる？」

ピカ「戦うためだけに人間に造られたポケモンがいるって聞いたことがあるが。そいつなのか？」

「ほう、知っているか。我が名はミュウツー、我を楽しませる戦いをしてくれよ。」

デン「そう簡単に勝てると思わないことだね。」

ピカ「まっ、ちゃっちゃと終わらせて帰るとしますか。」

戦うために生まれたポケモンとの戦いが始まった。

十話（後書き）

PV3000突破記念になんか番外編でも書こうかなって考えてる
ツス。

十一話（前書き）

番外編と同時投稿ッス。
にしてもぐだぐだになったッス。

十一話

ピカ達が圧倒的に優勢だった。

元からの数の差、それに一対一だったとしても、ミュウツーはピカ達に勝てなかったであろう。

ミュウツーは今まで力押しで瞬殺できていたため技術がつかかなかつた。

デンは今まで自分より力が強い者と戦った事があるから、そのいなしかたを知っている。

ピカに至っては純粹な力でさえミュウツーに勝っている。

つまりミュウツーには元から勝ち目がほとんど無かったのである。

ただ、ここまで圧倒的に負けていてもミュウツーが戦い続けているのは、「自分より強い者が居るはずがない」というおごりからであった。

ピカ（弱いものいじめみたいで気が引けてきたし、終わらせるか。）

ピカはデンに合図を送り、雷の槍で一斉攻撃をする。

そのあとデンが【雷パンチ】を放ち、続けざまに膝蹴りをくらわせミュウツーを吹っ飛ばした。

「ぐっ、必ず倒してやる。」

ドサッ

ミュウツーは倒れた。

デン「『必ず倒してやる』か、変な因縁つけられたし、今のうちに止めを刺しておこうか。」

デンは止めを刺そうと、ミュウツーに近く。

ピカ「殺す必要は無いだろ。」

デン「何故？後々面倒な事になる前に、因縁は断ち切っておくべきだよ。」

ピカ「俺が嫌だからだ。」

デン「答えになって無いし、僕が止めを刺すから、ピカは手を出さなくていいじゃないか。」

ピカ「それでもだ。」

デン「甘いね、敵を殺さずほっておくなんて。」

ピカ「わかつてるよ。でも嫌なものは嫌なんだ。」

デン「わかったよ、ピカの方が強いし、今はそれに従っけど、殺るときはきっちり殺らないといつか死ぬよ。」

ピカ「そうならないように、強くなるだけだ。」

デン「それがいつまで続けられるかな。あと報酬は5：5ね。」

ピカ「6：4でいいのじゃ無かったのかよ。」

デン「さっきの件。後の危険の分って事。それとも本気でもう一戦する？」

ピカ「わかった、5：5でいいよ。」

こうして依頼は終えられた。

番外一（前書き）

Gジェネレーションワールドとのクロスオーバー。

番外一

ピカはMS【ケンプファー】に乗り、ワールドシグナルの元へ向かっていった。

ピカ「あれがワールドシグナルの中心か。・・・殺気！」

巨大なビーム砲が発射され、ピカはそれを回避した。

ピカ「いきなり【メガソニック砲】とは、とんだご挨拶だな。」

敵MS【ガンダムヴァサゴ・チェストブレイク】と【ガンダムアシュタロン・ハーミットクラブ】は有無言わず攻撃を仕掛けて来た。

ピカ（パイロットが乗っていないのか？なら、どうして動くんだ？）

ピカは疑問を感じながらもバズーカを撃つ。

ピカ（やっぱり2対1はきついな。）

ガンダムタイプのMS、それもかなり高性能なMSを相手に行っているのである。

まあこちらのMSは、1年戦争記の物とは思えないほど改造しているのだが。

ピカ「くらいやがね。」

ショットガンでアシュタロンのハサミを一つ吹き飛ばす。

ヴァサゴのクロービームを避け、シュツルムファストを撃ち、ヴァサゴを撃破する。

そして、弱っているアシュタロンを、もう一発シュツルムファス

トを撃ち撃破する。

ピカ「これで終か？」

ピカが回りを確認している時、上からビームが来た。

ピカ「くそっ、次の敵は・・・かなり大型だな。」

ピカが見た機体は、【ナイチンゲール】と【アジール】であった。

ピカ（かなり手数が多いな。）

ファンネルの嵐をくぐり抜けながら、ショットガンで撃退しているのだが、攻撃はファンネルからだけで無く、敵機からも来るのでかなり厄介なのである。

しかもこちらは強襲用MS、装甲は厚く無いので、一発の被弾が命取りなのである。

ピカ（相手がでかいということは、的がでかかって事だ。）

アジールに向かって、バズーカを数発撃ち、撃破する。

そして、ナイチンゲールが接近戦を仕掛けて来たので、ビームサーベルで対応する。

相手のビームサーベルを蹴り上げ、相手の腕を破壊し、そのまま破壊する。

ピカ「また熱源反応、次は・・・もうやだ。」

四角い死神【サイコロガンダム】、紫の丸い悪魔【サイコハロ】、そして【デビルガンダムJr.】がいた。

こいつら一機だけでもかなりきついのに、三機まとめてである、かなりやばい、乗っているパイロットが一般人じゃ無いと、ほぼ勝

てないというレベルだ。

ピカ「やっぱ硬え。」

バズーカやショットガンを撃ってはいるが、あまりダメージを与えている様子は無い。

このままでは、なぶり殺し確定だ。

ピカ（弾数も少なくなってきたし、一次撤退したいんだが、そうさせてくれないよな。とりあえず一機撃破しておくか。）

どこからともなくチェーンマインを取出し、サイコハ口に巻き付け爆発させる。

さらにシュトルムファストも撃ち込み、撃破する。

ピカ（まずは一機）

3対1から2対1になり大分楽になったが、まだ油断出来ない状況には変わり無いのである。

ミサイルと四天王ビットをぐり抜け、至近距離からショットガンを撃ち、デビルガンダムJr.を撃破する。

そして、

ピカ「これで止めだ。」

ビーム砲を発射しようとする瞬間に、発射口にバズーカを撃ちサイコロガンダムを撃破する。

ピカ「もう終だよな。・・・っ!」

ワールドシグナルがさらに響き渡る。

ピカ「今度は・・・俺はもう逃げる。」

フェニックスガンダムの亜種【バルバドス】と公式チートなおひげのガンダム【ガンダム】が出て来ていた。

そして が月光蝶を放ち、

ピカ「＼（＾o＾）／」

となったのは言うまでもない。

番外一（後書き）

Gジェネワールドやった事ある人しかわからないと思うツスけど、敵のパイロットはすべてニューロという事をお願いするツス。

十二話（前書き）

よ、ようやく書けたッス。
あとキャラクター説明も更新したッス。

十二話

ピカ「やべ、また食料切れた。」

依頼を終え、また旅に出たのだが、保存食をあまり買い足していなかったので食料が尽きたのだ。

デントも別れているので料理もできない。

はつきり言って自業自得なのだが。

ピカ「また、このオチかよ。」

数日後、ピカはまた空腹で倒れた。

数時間後

???「おい、生きてるかー？」

一匹のヒトカゲがピカに近くが、ピカは返事をしない。

ヒトカゲ「はあ、死んでるんだったら、別の場所で死んでくれや。」

その言葉のあと、『グ』と腹の虫の音が鳴った。

ヒトカゲ「こいつの腹の音か？食い物は無いが、お茶なら・・・」

ピカはお茶をぶん取り飲んでいた。

そして飲み終わったあと

ピカ「お茶だけじゃ、持たない」

ヒトカゲ「奪うように取っというてそれかいな。」

ピカ「まあ、助かったよ。そういや、この近くに村か町あるか？」
ヒトカゲ「俺が、その近くの町のポケモンや。」

ピカ「ちょうどいい、町まで案内してくれ。」
ヒトカゲ「了解や。あと、一応自己紹介しとこか。ワイの名前はドンや、あんたは？」

ピカ「俺はピカだ。じゃあよろしくな。」

ドン「ああ、よろしゅう。」

そしてピカとドンは町に向かった。

ピカ「なんか、寂れているな。」

町に着いたのだが、なぜか活気が無い。

ドン「それはな、ここは土地は豊やねんけど、強い町に囲まれとつてな・・・」

ピカ「で、いつも狙われてたが、つい最近攻め込まれたか。」

ドン「まあ、そんなとこや。三竦みで手がなかなか出せへんだのが、一つここに攻め込んで来たさかい・・・」

ピカ「他の町も攻め込んで来ると。」

ドン「そういう事や。宿のおっちゃんも逃げてもうたさかい、泊まる所も無いで。」

ピカ「一応、自衛の為の軍とかも有るんだよな？」

ドン「まあ、前の時の事で壊滅状態やけど、存在はしてるで。」

ピカ「壊滅状態って事は、人員も募集してるって事だよな？」

ドン「そこに所属してる自分が言うのもなんやけど、止めといた方がいいで。死ぬだけやさかい。」

ピカ「大丈夫だよ、過去に何回か死にかけたけど、少しは修羅場くぐり抜けて来てるから。」
ドン「何言っても無駄みたいやな。まあ、入るにしても、入団テストみたいなん有るさかい、それに合格しやなあかんで。」
ピカ「了解。」

そしてピカは戦場に身を投じる事になる。

十三話（前書き）

やっと書けたッス。

テスト わりとすぐに大会 次の日から合宿はきつかったッス。

にしても更新は遅い、内容はぐだぐだ、良いところ無しッスね。

十三話

ピカは入団テストにあっさり合格していた。

ドン「やっぱ、合格したんか。」

ピカ「まあな。」

ドン「他の新人とかとの顔合わせが有るからついてき。」

ピカ「え〜、めんど・・・」

ピカがそう言いかけたとき、ドンがピカを引きずって行った。

「新人歓迎会を始めるぞ〜。イエーイ。」

ピカ「なんだ、こりゃ。」

ピカは少し混乱していた。

いつ敵に襲われるか判らない状況でこんな宴会をするのかを。

おまけに、包帯を巻いたりしている怪我人（ポケモンだけ）まで参加している。

ピカ「本当に大丈夫なのか？」

ドン「この奴らはな、こういう馬鹿騒ぎが好きなんや。ここ最近辛気臭さかったさかいパーっと騒ぎたいんやろ。」

ピカ「・・・そうか。まっ、他の奴と顔合わせしてくる。」

ドン「ほな、行ってら。」

ピカ「この料理食ったことある味なんだよな。」

そんなことを言いながらピカは、隅の方、一匹で食べているヒノアラシを見つけた。

ピカ「よう、お前も今日入ったばかりの奴か？」

ヒノアラシ「……こくつ（頷く音）」

ピカ「それぐらい、喋れよ。まあいいや、俺はピカお前は？」

ヒノアラシ「……ヒノだ。」

ピカ「……そうか、よろしく。（こいつ会話に無らねえ）」

ピカがそんなことを考えていると、一匹のアチャモがやって来た。

アチャモ「こんな無口で仏頂面な奴に話し掛ける奴は初めて見た。」

ピカ「ヒノと知り合いなのか？」

アチャモ「そうだな、同じ仕事柄ちよくちよく見かける。」

ピカ「そうか、そついや名乗って無かったな。俺はピカあんたは？」

アチャモ「ああ、俺はチャモ。そついえば、この飯は旨いな。」

ピカ「この飯作っている奴に心当たりあるわ。」

ヒノ「……？」

二匹が首を傾げているときに、『この飯作っている奴』がやって来た。

デン「やあ、ピカじゃないか。」

ピカ「やっぱりデンだったか。」

デン「ここは、契約金がいいからね。」

チャモ「貴方がこの食事当番だな。どうしたらこんなに旨い飯が・

・

ピカ「それ以上は言うな！」

だがピカの制止も虚しく。

デン「ハハ、こんなもの、あれだけこき使われたらね。ハハハ・・・」

「
ピカ「遅かったか。こうなるから止めただけ。」

ヒノ「・・・めんどくさい奴。」

チャモ「家内に料理を教えて欲しかったのだが。」

ピカ「結婚してたのかよ。」

チャモ「何か不思議か？」

ピカ「俺とそんな歳変わらないだろ。・・・」

そんな感じで夜は更けていった。

十四話（前書き）

なんとか書けたッス。
毎度のことながらグダグダッスけど。

十四話

ピカ（やっぱ数が多いな。）

ピカは戦場で暴れていた。

ピカ（にしても、全部一斉に攻め込まなくても、いいじゃないか。）
普通はそんな事も考える暇も無いほどの、敵の数なのだが。ピカは一撃も攻撃を喰らわず、敵を倒している。

ピカ（こいつら、これだけやられて撤退する気配が無い。何か必ず勝てる策でもあるのか？）

かなり蹂躪・・・しかも事実上一匹されているのに敵は引く気は無く。それどころか『これさえ凌げれば』という事すら感じた。

ピカ「早く終わらせないとやばいかもな」全員下がれ！」

ピカはそう言うと同時に、雨雲を引き寄せ【雷】を放った。

ピカ（あらかたかたずいたな・・・ん？何か来る。）

空から大量の隕石が降ってきた。

ピカ（【竜星群】かよ。おまけに一匹や二匹が放った数じゃ無いぞ。大技は疲れるから連発は避けたかったんだが。）

エネルギーを一点に集束させ、それを一気に解放するかのような大爆発を起こし、【竜星群】を防いだ。

ピカ（防いだのはいいものの、立っているので精一杯だ。第二波が来ないといいけど・・・ってまたかよ諦めの悪い。防ぎ切れるか？）

再び大爆発を起こし【竜星群】を防ぐ。

ピカ（やばい、体力とかも攻撃のエネルギーに変換したから意識が・
・・）
ピカはその場で倒れてしまった。

別の戦場

ドン「なんや、あの爆発は。」

デン「ピカの所で起こったみたいだけど。」

ドン「あらかた片付いたし、救援に行くか？」

救援に行こうとしたとき、強力な一撃が飛んできた。

ドン「あらかた片付いたと思ったら、まだ強いやつが居たんか。それも見たこともないやつが。」

ドン達の目の前にはデオキシスがいた。

デン「僕ってこういうのに縁があるのかな。あんな見たこともない奴に。」

ドン「ははは。それはご愁傷様。」

デン「来るよー!」

また別の戦場

チャモ「流石はでんせつのポケモンだ。かなり強い。」
ヒノ「ぜえ、ぜえ」

ヒノ達はファイヤーと戦っていた。

チャモ「だが、そろそろけりをつけさせてもらおう。」
ヒノ「……………（武器を構えなおす。）」

それぞれの戦場で、それぞれの戦いが始まった。

十五話（前書き）

PV5000、ユニーク1000突破ツス。

読んでくれている人ありがとうツス。

後書きで追加連絡もするツス。

えっ、伝説のスイーツ作りに行けって、いきなりっすか。勘弁してほしいツス。

十五話

チャモが【ブレイククロー】で切り裂き、ヒノが槍で攻撃をする
が、ファイヤーはギリギリのところまで飛翔回避し、なかなか決定打
を与えることができない。

しかも相手の火力は高いので、同じ炎タイプの攻撃をくらったと
してもこちらはただでは済まない。

あと、ヒノは何度か直撃を与えているが、それでもダメージをあ
まり受けていないようであった。

チャモ「相手が空を飛んでいたらこちらに分が・・・」
ヒノ「・・・隙を作る。」

そういつとヒノは、素早く動きながら【スピードスター】を放っ
た。

ダメージは全くと言っていいほど与えられていない。むしろ相手
を苛立たせているだけであった。

そして、ファイヤーは怒りに身を任せ【ゴッドバード】で突撃し
た。

ヒノはそれを紙一重で避け、逆に攻撃を外してしまったファイヤ
ーは大きな隙を作る結果となった。

チャモ「止めだ。」

チャモが再び【ブレイククロー】で切り裂き、ヒノが槍に炎をま
とわせ【フレアドライブ】を繰り出した。

ファイヤーは避けることができず直撃をくらう。だが、

ヒノ「!!!?」

チャモ「くっ」

攻撃力が足りないが故ファイヤーは攻撃を耐えきり【炎の渦】を放ってきた。

【炎の渦】の中チャモは、

チャモ（あと一歩で死にそうになるとは、もう少し力があれば。）
そのとき、チャモの体が光り【ワカシャモ】に進化した。

チャモ（これなら。）

【岩石封じ】で【炎の渦】を防ぎ脱出する。

チャモ「もう一度隙を作ってもらえるか。」

ヒノ「……やってみる。」

ヒノは【煙幕】で相手の視界を封じにかかったが、すぐに【吹き飛ばし】で【煙幕】は掃われる。だが、

チャモ「一瞬の隙さえあれば。」

チャモが【岩石封じ】で攻撃＋動きを封じ込め、そこにヒノが止めと言わんばかりに槍を突き刺した。

ファイヤーは断末魔を上げそのまま生き途絶えた。

チャモ「流石は伝説、手強かった。」

ヒノ「……」

そのころ

デン「速かったり、堅かったり」

ドン「かと思えば、鋭い攻撃をしてきたりと、いったい何者なんやこいつは。」

ドンとデンはデオキシスに苦戦していた。

十五話（後書き）

ピカ「作者が伝説のスイーツ作りに駆り出されているから、代わりに俺が連絡をするぞ。

PV5000 記念の番外編を書くから、次のうちから選んでほしいぞうだ。

今まで出てきたキャラクターの話（どのキャラクターの話が見たいかも）

何かとクロスオーバー（どの作品とクロスオーバーするかも）

この二つから選んでほしいぞうだ。

どちらにするか感想で送ってほしいぞうだ。

その中で一番多かったのを書くらしい。

まあ、クロスオーバーする作品によっては作者が知らないから無理な場合もあるから、そこは了承してほしい。

×切は9月17日いっぱいまでだぞうだ。

じゃあ待っているからな。」

ピカ「いくら文才の無い作者でも無反応だったら泣くだろうな（ボソッ）」

十六話（前書き）

なんとか書けたッス。

にしても、安価出したのに全く返ってこなくなって、これほど悲しいことはないッス。

十六話

デンは【雷パンチ】で殴り掛かるが、デオキシスは【ディフェンスフォルム】でそれを防ぎきる。その隙にドンがデオキシスのコアを狙うが、すぐに【スピードフォルム】で避けられる。

ドン「ころころ姿変えて、めんどくさい敵や。」

デン「姿によって能力変わるからね、余計にね。」

デオキシスの攻撃をなんとか回避しながら、そんなことを話している。

デンが相手の腕をつかみ【電磁波】を流そうとするが、体ごと腕を持ち上げられ地面にたたきつけられる。

デン「かはっ」

たたきつけられた衝撃でデンは口から血を吐き骨もいくらかは折れた。

だが、ドンがその隙を突き武器で思い切り攻撃する。デオキシスも【ディフェンスフォルム】で防御するが、防ぎきれずダメージを受ける。

デンもその間に距離をとる。

ドン「大丈夫なんか？」

デン「はつきり言うて死にそう。」

ドン「大丈夫やな。」

デン「ひどいなあ。っともう来るよ。」

二匹が会話しているうちにデオキシスが起き上がるが、ダメージを受けたシヨックで暴走し始めた。

【アタックフォルム】で【破壊光線】や【ギガインパクト】等高威力で反動がある技を、反動を無理やり無視して連続で放ってきた。

ドン「無茶苦茶や。」

デン「あんな攻撃をして体が持つわけが無いよ。」

ドン「体にガタが来た時に一気にやな。」

デン「でも、それまで避け続けられるかどうか・・・」

デンは先ほどダメージを受けているし、ドンは重い鎧を着ているため、あまり素早くは動けない。その上デオキシスの攻撃は、一撃くらっただけで体が吹っ飛ぶような攻撃ばかりである。

【破壊光線】がドンの鎧にかすり鎧の一部を吹き飛ばした。

ドン（かすっただけでこれか。鎧着て無かったら確実に腕が吹っ飛んどった。）

突然、糸が切れた人形のようにデオキシスが動かなくなった。

デン「反動を無視していたつけがきたのかな。」

ドン「俺はもう動けへん。とりあえず基地に戻ろうや。」

デン「そうだね、あいつもあれだけ無茶なことをしていたんだ、その反動だったら生きているはずがないよ。」

そういつて後ろを振り向いたら、デオキシスの目が光り最後の力を振り絞るかのように【サイコバースト】を放ってきた。

その攻撃を間一髪で避け、デンが【雷パンチ】でデオキシスをドンの近くに吹き飛ばし、ドンは【オーバーヒート】を放ちながら武器で思い切り殴った。

ドン「油断しとったで。最後まで気抜いたらあかんな。」

デン「僕も止めを確実に刺さずに安心するなんてどうかしていたよ。」

そして、ドンとデンは基地に戻っていった。

十七話(前書き)

いつもより早めに書けたッス。

十七話

ピカがいる戦場では。

「こいつ、あれだけの【竜星群】を一匹で防ぎやがった。」

「しかも一回だけでなく二回も。こいつのほうか化物じゃないのか。」

「体力を使い果たし倒れているピカを助けようとする者はいなかった。それどころか、得体のしれない化物を見るような目をしているものばかりであった。」

だがそこに竜の大群がやってきた。

圧倒的な質と量を目の前に絶望し、逃げ始める者もいれば・・・

「おい、化物助けてくれよ。」

都合よくピカに助けを求める者もいた。

そして、敵のポケモンが、

「そこで倒れているピカチュウ以外は、ただの臆病者の集まりか。」

「おそらく、そのピカチュウが【竜星群】を防いだ者であろうから、止めを刺さねばこちらがこちらがまずいが。それ以外は殺すに値せぬな。」

そしてガブリアスがピカにとどめを刺そうと近づいたとき。

「こいつが死んだら、誰が俺たちを助けてくれるんだよ。」

そう言っで一匹のポケモンがガブリアスの目の前に立ちふさがる。それを見たほかの味方たちも、

「そうだ、こいつが死んだら俺たちの命がやばいんだ。」

「こいつが【竜星群】を防いでくれていなかったら。俺たちは死んでいたんだ。」

等、士気を上げ竜の軍団に向かっていく。

だが、士気が高く善戦しているとはいえ、もともと戦力が大幅に劣っている軍が勝てるわけがなく。一匹また一匹と殺されて行く。

ピカは意識を取り戻しその光景を見た。

ピカ（俺の力が足りないからこうなったのか。俺にもっと力があれば、誰も殺さずに戦えるほどの力があれば。動いてくれよ俺の体。できや）

ピカ「俺が俺で無くなっちまう気がするんだ。」

ピカの甘過ぎる純粹な願い。そして、無意識に星のエネルギーを使い。

ピカ「待たせたな。」

背中に光る蝶の羽のようなものを広げたピカがいた。

その姿はピカが無意識にイメージした最強の力。

光る蝶の羽はオーバーフローしたエネルギーにすぎない。ではオーバーフローしていない分のエネルギーはどこに行ったかというところ、ピカの体の中である。

つまるところエネルギーを容量オーバーするまで吸収し自身を強化しているのである。

カイリユウが【神速】でピカを攻撃したが、短剣一本で受け止め弾き返される。そして、オーバーフローしている分のエネルギーで加速し近くにいたガブリアスを蹴り飛ばす。

ボーマンダが空中から攻撃しようとするが、【雷】で撃墜される。

戦いの様子はまるで世界の終末の時のようであった。

だがその力は一匹のポケモンには過ぎた力である。今はまだ何も

起きていないが、いつ暴走したりピカの体が崩壊してもおかしくはないのである。

そんな力を使いながらピカは敵を殲滅した。ただ畏怖の念を集めながら。

そして、すべての軍の被害が大きくなったため戦争は終結した。

十七話（後書き）

グダグダで終わらせ方も無理やりツスね。
文才が欲しいツス。

十八話（前書き）

書けたッス。

長期休暇の時より書くのが早くなるのはなんでッスかね。

十八話

町の門の前

ドン「一応聞くけど。もう行くんか？ここやったら仕事もあって金に困ることも無いで。」

ピカ「まあ、どこかふらついているほうが性に合ってるんでね。それに、少しやり過ぎちまったみたいなんでね。当てのない一人旅に戻るさ。」

ドン「そうか、町の復興がある程度終わったら、俺も旅に出ようかね。外の景色には興味あったんや。」

ピカ「じゃあ、また会えるかもな。」

ドン「そうやな。またな。」

ピカ「おう、またな。」

そしてピカはまた旅に出た。

ピカ「で、ここはどこだ。」

数時間後、適当に歩いていたら迷子になっていた。もはやこれがデフォである。

ピカ「ま、いいか。」

また、適当に歩き出す、それだから迷子になるっていうのに。

さらに数分後

マリル「ねえ、”デン”で言う名前前のデンリユウ知ってる？」

ピカは一匹のマリルに出会った。

ピカ「てめえが誰か知らないが、まず名乗るのが礼儀だろう。」

マリル「めんどくさいわね。私はマリよ。これでいい？」

ピカ「めんどくさいってなあ。俺はピカだ。あと一応聞くが、”デン”ってのはどんなデンリユウなんだ、特徴は？」

マリ「特徴ね。まあ、料理をはじめとする家事全般それなりにすごいわよ。」

ピカ「それならたぶん知ってるが、知り合いか？」

マリ「知り合いよ。使いパス・・・家事を手伝ってくれる人がいなくなつて困ってるのよ。どこに居るか知らない？」

ピカ「(デンのトラウマの原因はこいつか。居場所は黙つといてやるう。最後に会ったのはだいぶ前だからどこに居るか知らないぞ。」

マリ「で、本当のことは？」

ピカ「だからいっ」

シュツ

ピカの頬を何かを通り過ぎ、頬に傷ができる。そしてピカは冷や汗をダラダラ流す。

マリ「次、つまらない嘘をついたら眉間にこれを刺すわよ。」

マリが手に持っているのは氷の針だ。さっき投げたのもこれだろう。

ピカ「なぜ、嘘だと。」

マリ「強いて言うなら、女の勘。」

ピカ「わかったよ。俺が前居た・・・って町にまだいると思う。に

してもデーンに何やったんだ。」

マリ「ちよつと一日22時間程こき使っただけよ。根性ないわよね。」

ピカ「・・・さいですか。」

ピカはデーンの冥福を祈りながらマリを見送った。

十九話（前書き）

やっと書けたッス。

今回は更新遅かったうえにいつにもまして短いッス。

十九話

ピカ「うー、さぶ」

ピカは雪が降るような地方に来ていた。

深々と雪が降る中どっからともなく手に入れた防寒具を着て町を歩いていた。

ピカ「なんか体が温まるものが食べたいな。こういう寒い地域の飯は煮込み料理が相場だろうしな。・・・ん？」

『ジャンボパフェ30分以内に食べきればタダ。』という張り紙であった。完全に食べたい物とは趣旨が違う。だが、

ピカ「寒い所でパフェもいいよな。」

迷いもせず店に入っていった。

ピカ「おお。」

ピカの目の前には特大のパフェが置かれていた。その大きさは、甘い物が嫌いな人が見たらそれだけで嫌気がさすような大きさだった。

それをピカは

ピカ「何個でも時間以内に食べ切れたらタダだよな。言質はとったぞ。」

など言っで一気に5杯も頼んでいた。

そして2分後

ピカ「食った。食った。」

明らかに体積以上のものを、えげつないスピードでかたずけていた。

ピカ「追加でシチューお願いします。」

『まだ食うのかよ』と周りにいた全員が思ったそうなの。

ピカ「食った、食った。」

ピカは店を出て適当に広場の方へ向かっていた。

ピカ「雪合戦か子供は元気だな。」

広場の光景を見てこういうことを言うあたり、精神なはすっかりオヤジである。

その光景を見ているときに雪玉が飛んできてピカの顔にあたる。

「わーい、当たった。」

子供達がわざと狙って投げたのである。

ピカ「わざとか。わかった、よろしいならば戦争だ。」

大人げなく怒り、大量の雪球を作り、雪合戦に参加した。やっぱり精神はガキである。

そして数時間後

ピカ「もう夕暮れか。暗くなる前にさっさと帰れよ。」

「はい。」

子供達はそう言って散り散りに帰って行く。

そしてピカは

ピカ「そっぴい俺、何でこんなことやってるんだ。」

ふと我に返り、疑問を持つたが

ピカ「まっ、いつか。」
めんどくさいから流した。

と、まあ、ピカの日常はこんな感じで過ぎて行くのです。

二十話（前書き）

書けたッス。

にしても更新速度が安定しないっすね。

二十話

ピカ「そろそろ家に顔出しに戻ろうかな。」

ピカは唐突にそんなことを思い付いた。

ピカ「思い立ったが吉日っていうし一旦帰るか。」

そしてピカは帰路に就いた。

帰りの道中

ドン「ピカやないか。久しぶり。」

ピカ「久しぶり。」

ドン「旅は道連れ言うしちよつとついて行っていいか。」

ピカ「・・・まあいいけど。」

ドン「んじゃ、ついて行くからよろしゅう。」

ドンがついて来た。

また別のところで

デン「久しぶり。」

ピカ「何でこんなに知り合いに会うんだ。」

デン「ん？ヒノもいるよ。」

ドン「ヒノも居るんか。」

デン「ちよつとある奴から逃げていてね。二匹だけだと心配だからついて行って良いかい。」

ドン「俺はええけど、ピカは？」

ピカ「・・・もう、別にいいよ。（）と言うか逃げられたんだ。（）」

デン「じゃあ、ヒノに言ってくる。」

デンとヒノがついて来た。

ピカ（家帰るのやめようかな。）

これだけぞろぞろついて来られたら、そう思つのも当然である。

ピカ（もう家も近いし諦めるか。）

諦める時は割と早いようだ。

ドン「そういや、ピカは目的地があるような動きしてるけど、どこに行くかとしてるんや。」

ピカ「実家だよ。」

その一言にヒノ以外の全員が反応する。

ドン「ピカ家族生きとるんか。」

ピカ「俺が言うのもなんだが、家族全員殺しても死なないようなやつばっかだ。」

ドン「そっちの家族生きとるんか。こっちの家族はな・・・」

ドンはうつむき暗い顔になる、その時デンは

デン「家族がどうなっているか、わかっているだけかもしれませんが、僕は帰るうにも帰れないからね。特に気にしてないけど。」

ドン「そうやな、昔のこといつまでも気にしてたらあかん。辛気臭い話は終わりや。」

ドンがパンと手をたたき音を鳴らして話を終わらせる。

ピカ「どうでもいいけど、家についてもあまり騒ぐなよ。めんどくさいから。」

ヒノ「・・・こいつらに出来ないと思う。」

ヒノは軽く一蹴した。

ピカ「さて、家に着いたつと。・・・って何勝手に上がろうとしてるんだよ。友達の家に来てはしゃぐ子供かお前は。」

ドンが玄関を開け先に家に入ろうとしていた。

ドン「そう固いこと言うなや。」

ドンがそういつた瞬間、誰かに吹っ飛ばされた。ピカ達全員吹っ飛ばされたドンを避けた。

そして中からピチューが出てきた。

ピチュー「玄関から入ってくるドロボーさんもいるんだね。・・・あっ、お兄ちゃんおかえり。後ろの人たちは？」

ピカ「ただいま。お前が吹っ飛ばしたの含めて俺の知り合いだ。」

ピチュー「えっ？」

ピカ「怪しい奴が入ってきたから撃退するのはいいけど、ピチューとりあえず手加減覚えような。」

ピカの論点もずれていた。

そして、気絶しているドンをほっといてピカ達は家の中に入った。

二十話（後書き）

ピチュ・・・いい名前が思い付かなかったからこうなったッス。
ピチュの名前募集しますッス。

作者がこれだと思ったのを採用するッスから、募集が終わったら
活動報告に書くッス。

二十一話（前書き）

だいぶお待たせしたツス。

書き上げるのが早いのか、遅いかわからないツスね。

二十一話

ピカ「とりあえず、あらためて挨拶だな。ほらピチュ。」

ピチュ「初めましてピチュです。」

デン「う、うん、よろしく。」

ピチュは礼儀正しく挨拶するがさっきのことがあったのでデンは戸惑っている。ヒノは特に反応はないが。

そして、前話で吹っ飛ばされたドンがやってくる。

ドン「ピカ、お前の妹凶暴すぎやろ。」

ピカ「ちよっとお転婆なだけだつて。」

ドン「この兄バカが。」

兄バカの部分には、デンもうなずいていた。

ピカ「そっぴいや母さん達は。」

ピチュ「用事で今日は帰ってこれないつて。」

ピカ「飯は自分で何とかしろと。」

そっぴいって、ピカは食糧庫の中をあさる。

ピカ「おっ、珍しいことに肉がある。量的にも焼肉ができそうだな。

デン焼番頼む。」

デン「わかったよ。」

デンは下準備に大所へ向かう。ピカは鉄板を用意しておいた。

ドン「焼肉か・・・焼肉將軍の座をかけて勝負やな。」

ピチュ「面白そー。ピチュもやる。」

ピカ「まあいいけどさ、少しはしゃぎ過ぎじゃないか?」

ドン「いいやないか。こういうのは楽しんだ者勝ちや。」
ピカ「そうかい。ヒノはどうする、って意外とやる気満々かよ。」
ヒノはすでに箸と皿を持って鉄板の前に待機していた。

デン「用意できたよ。」
デンが肉を持ってくる。

ドン「肉が来たな。焼けてない肉は取らない、相手を直接殴ったりして妨害するのは無し、使用する武器は箸だけ、ルールはこの三つや。」

ピチュ「はい。」

ピカ「了解」

ヒノは無言で肉を見ている。

デン「なんか知らないけれど、肉焼き始めるよ。」
闘争が始まった。

ドン「ヒノ、その肉諦めたらどうや。」

ヒノ「……………」

ドンとヒノは現在肉の取り合いをしている。

ピカ（俺、漁夫の利状態だな。）

そんなことがあるので悠々自適に肉を食べているピカとピチュ。
ちなみにデンは、肉を焼きながらさりげなく自分の分を確保していた。

ドン「妨害するよりも肉確保したほうが効率的やな。」
ドンは肉の確保にかかる。

ピカ（そろそろかな。）

ピカは肉に何かを仕掛けた。

ドン「おっ、この肉焼けてきてんな。」

ピカの仕掛けた肉を食べたまま硬直してしまった。

ドン「痺れ薬か？」

ピカ「肉自体に何かしたらいけないってルールはなかったからな。」

ドン「外道や。」

ちなみにヒノも毒入りを引いていた。

ピカも一切れ取ると。

ピカ「あっ」

ピチュ「どうしたの？」

ピカ「自分で当たり引いた。耐性ついてるから何ともないけど。」

馬鹿やっていた。

数時間後。

ドン「ほとんど食えんかった。」 その後も痺れ肉に当たり続けた。

ヒノ「・・・・・・腹は膨れた。」 戦果はそれなり。

ピチュ「ごちそう様。」 ピカの近くだったのでハズレがどれか見ていた。

ピカ「そっぴやデンは？」 耐性があるから当たり外れ関係なし。

デン「？」

デンの皿には肉の山があった。

ピカ「こりやデンの勝ちだな。」

ドン「そっぴやな。」

デンは焼肉將軍の称号を手に入れた。

二十二話（前書き）

書けたッス。

本当に更新速度も書き方も安定しないッスね。

二十二話

ピカ「行つたか。」

ピカは茂みから顔を出す。

ピカ「人間がいるなんて、えらい所に迷い込んだもんだな俺も。」
とある森の中ピカはつぶやいた。

???「この森にピカチュウがいるって聞いたんだけどな。」
とあるトレーナー（ミニスカート）はピカチュウを捜し歩きまわる。

ピカ「またかよ。って、ん？」

トレーナーの前に見たことがあるミュウツーがいた。
ミュウツーは容赦なく【サイコカッター】を放った。
足がすくんで動けないトレーナー。そしてピカは。

ピカ「くそっ。」

とつさにトレーナーをかばうピカ。

二本のダガーで【サイコカッター】を受けるが、【サイコカッター】の威力と武器の今までの疲労で折れてしまい、攻撃は直撃してしまふ。

前にも言ったことがあるが、ピカチュウの耐久力は紙である。

【サイコカッター】はピカを深々と切り裂き致命傷を与える。

ピカ（俺も何考えてるんだろうな。見ず知らずの奴、しかも人間を

助けるなんてな。まあでも、やれるだけやってみるか。(
折れたダガーの先を雷で作り、血を大量に流しながら構える。

ピカ「悪いが、加減なんて利かないからな。」

「加減などしなくともよい。我をコケにした対価、命で出払ってもらう。」

ミュウツーは【サイコブレイク】を放つ。

ピカは雷の刃で受け流し、一歩一歩ミュウツーに近づいて行く。
ミュウツーの攻撃をすべて受け流し近づき切りかかる。

死にかけのはずなのに、動き、近づいてくる。攻撃しても当てる
ことができない。その恐怖のせいでミュウツーはピカの単調な攻撃
を避けられず倒れた。

トレーナーは混乱していた。

目の前に現れる筈のないミュウツーが目の前に出てきて、いきなり
出てきたピカチュウが自分をかばって大怪我をして、ミュウツー
を倒した。

これだけのことが、いきなり目の前で起こったのだ。混乱してい
てもおかしくない。

そしてピカがミュウツーを倒したとき、ようやく我に返った。

トレーナー「助けてくれたの。どうして。」

混濁しつつある意識の中でピカは答えた。

ピカ「誰かを助けるのに理由があるのか。」

ピカの言葉はトレーナーに伝わっていないだろう。だけどピカは

答えた。

そしてピカは、そのまま倒れた。むしろ、今まで意識があったのがおかしいぐらいである。

トレーナー「ポケモンセンターに連れて行ってあげなきゃ。」

トレーナーは血まみれのピカを抱きかかえ、ポケモンセンターに向かった。

二十二話（後書き）

トレーナー（ミニスカート）の名前はぶっちゃけ決めてないツス。
トレーナーの名前も募集するツス。

本当にこういうの多いツスけど、協力お願いしますツス。

二十三話(前書き)

書き終わったッス。

ちなみにこれで第一章は終わりっす。

二十三話

トレーナーはピカを抱えポケモンセンターに駆け込む。

トレーナー「ジョーイさんこの子を助けてください。」

「ひどい怪我ね。早く手術の準備を。」

ジョーイさんは、他に勤務している人達に声をかけ、手術の準備を始める。

ポケモンセンターの機械では、体力や小さな怪我なら治せるが、ここまで大きな怪我には効果はないのである。

手術が始まりトレーナーは祈ることしかできなくなる。

自分の手持ちではないとはいえ、助けてくれたポケモンである。無事を祈ることはする。

刻一刻と時は過ぎて行く。そして数時間後

「なんとか峠は越えました。」

トレーナー「本当ですか。」

「ええ、生きているのが不思議な位の傷でしたが。それよりもあなた、あの子のトレーナーじゃ無いわね。」

トレーナー「はい。」

さっきまでとは一転し空気が変わる。

「これからどうするの、あの子はもう野生には戻れないわよ。」

トレーナー「私の手持ちにします。いきなりで私に懐いてくれないかも知れないけれど、それでも私の手持ちにします。」

「それだけの覚悟があれば大丈夫ね。あと峠は越えたけどあの怪我

だからいつ目が覚めるかわからないわよ。」
ジョーイさんはトレーナーの覚悟を確認し、一言言って去っていった。

所変わりピカは

ピカ「ここはどこだ。とりあえず川が見えるけど。」
三途の川に居たりしていた。

ピカが三途の川に近づいていくと、ツインテールで赤い髪をし大鎌を持った女性が現れた。

「あんた、それ以上進むと現世に戻れなくなるよ。」

ピカ「“現世に”って俺は死んだのか。」

「いや、ギリギリの所で生き延びたみたいだね。肉体と魂が繋がっているうちに戻りな。」

ピカ「わかったよ。あと、後ろに誰かいるけど、それはいいのか。」

女性は恐る恐る後ろを見。「きゃん」と驚いたような声を出した。

ピカ（長くなりそうだし、とつとと行くか。）

説教されている女性を見て、ピカはさっさと逃げることにした。

ピカの手術が終わってから数日後

ピカ「ここはどこだ。」

ポケモンセンターのベッドの上で目を覚ました。

トレーナー「よかった、目が覚めたんだ。」

トレーナーはそういってピカを抱き上げる。

ピカ（息ができない、傷が響く。）

当の本人はまた死にそうになっているが。

トレーナー「野生に戻れないだろうから、私の手持ちとしてよろしくね。」

ピカ「えっ、結局貧乏くじ引いただけかよ。」

ピカの悲痛な叫びが周りに響き渡った。

二十三話（後書き）

この後一章エピソードと各話裏話を書いて行こうと思ってるっス。
エピソードでトレーナーの名前を決めようと思ってるっスから
名前の投稿よろしくお願いしますッス。

第一章エピローグ（前書き）

書けたッス。エピローグらしくない仕上がりになったッスけど。

第一章 エピローグ

ピカが入院から数日後、ようやく退院することになった。死にかけていたのだから当たり前である。

ピカ（にしても毎日来やがったなあ、キリ。菓子はありがたかったけど。）

キリはトレーナーの名前である。

毎日やって来ては抱きつかれたりするのだ、傷に響くし、あまり動けないので逃げられない。たまったものじゃ無かったのである。

ピカ（意思疎通できないのが本当にきつい。）

ピカにはの人間言葉が理解できるのだが。人間にはわからない。人間にはピカはピカチュウの鳴き声にしか聞こえないのである。

キリ「家に着いたよ。ピカちゃん。」

ピカ（名前の呼ばれ方はそのまま助かったが“ちゃん”付けで呼ぶのはやめてほしい。・・・にしても家か。）

キリは玄関を開け中に入って行く。

ピカ（トレーナー付きのポケモンになったから諦めるか。）

ピカも家の中に入る。

キリ「ただいま。」

????「キリさん、おかえりなさい。そっちのピカチュウが新しく来たポケモンですか？」

家の中には一匹のミュウがいた。

キリ「汐ちゃん帰って来てたの。」

汐「はい。用事も終わったので帰ってきました。」

汐と呼ばれたミュウは人間の言葉でキリと話している。
そのあとキリは台所へ行き、汐はピカのほうを向き、

汐「そのあなたは、なんていう名前なんですか？」

ピカ「ピカだ。」

汐「汐です。これからよろしくお願いしますね。」

ピカ「ああ、よろしく。」

台所にいたキリが出てきた。

キリ「焼いておいたケーキ持ってきたよ。」

ピカ「ケーキ!!!」

汐「本当にお菓子が好きなんですね。」

ピカ「菓子とゲームがあればそれで十分だろ。あとはおまけみたいなものだろ。」

ピカははつきりそう言い切った。

そして夜になり、ピカは屋根の上に居た。

ピカ「今日は十六夜か。月を肴にサイダー飲むだけだから何の月でもいいんだけどな。汐も飲むか。」

ピカは後ろを振り返りそう言う。

汐「気付いていたんですか。あとサイダーは貰います。ここでもまくやっつけていけそうですか。」

ピカ「“うまくやっつけていけるか”じゃなくて“うまくやっつけていく”」

しかないんだろ。抱きついてこられるのは勘弁してほしいけどな。」
汐「キリさんも悪気があってやっているんじゃないですよ。」
ピカ「それでもこっちにとってはいい迷惑だ。」
汐「まあ、そのうち慣れると思いますよ。」
ピカ「そんな慣れは嫌だ。」

そうしてピカの新しい生活は始まっていく。

第一章エピローグ（後書き）

一章終わりッス。

あとは、一章の裏話を投稿するッス。

第一章裏話（前書き）

裏話ッス。

グダグダな上、読まなくても問題は無いッス。

第一章裏話

まず、第一章自体が、ピカの成長を描こうとしたツス。実際は全くと言っていいほどできていないツスけれども。それから各話の解説つす。

一話、二話は主人公であるピカの性格と初期の能力を出そうと決めた回ツス。

バンギラスが出てきたのも強くて見た目がだったからツス。やっていることは、どっちが悪人かわからないツスけど。ピカは我を貫く奴ツス。

あと『紅い一撃だ』と叫ばしているのはノリツス。セリフの元ネタは『ガンダム Seed Astray』からツス。たまにガンダムのセリフをピカらしく言わせているツス。

三〜六話はチートスキル追加ツス、話の内容は『人助け』ツスけど、書きたかったのはチートスキル追加ツス。元から持っていた方の能力は強すぎるので使わせる気はあまり無いツスけど。

『荒んだ心の奴に武器は危険なんだよ！』の元ネタは『Vガンダム』からツス。作者の趣味丸出しツスね。

七〜八話は追加能力の説明と便利アイテム追加ツス。

九〜十三話は主要キャラクターの追加ツスね。これからも出す予定ではあるツス。

十七話はピカの覚醒とそれによる弊害ツス。

強すぎればそれだけ周りから避けられる。はみ出し者は嫌われるってことツス。強さには代償が必要だと思ってるツス。

『俺が俺で無くなっちまう気がするんだ。』の元ネタは『ポケッ
トの中の戦争』からッス。

十九〜二十一話はなんてことのない日常ッス。

二十一話は特に今まで割とシリアスをやってきた分、ギャグ成分
を強くしたかったッス。

二十二〜二十三話は手持ちポケモン化ッス。

話の一つの区切りとして考えていた話ッス。話の構想自体は最初
からある程度できていたッス。

第一章は終わったッスが、話自体はまだ続くッス。
駄文ですが、これからも、お願いしますッス。

二十四話(前書き)

ようやく書けたッス。

二十四話

ピカがキリの手持ちになってから数日が過ぎていた。

キリは日中、学校に行っているの、ピカは基本的に平和に暮らしている。そして暇も持余しているため、自分で勉強し機械いじりをよくしている。

最初は言葉が通じないのがつらいといって、自分の言葉を人間の言葉にするのを作ったのである。

そんな風に暇を持て余しているピカの日常の一つである。

汐「キリさん、お弁当忘れて行ったみたいなので学校まで届けに行ってくださいませんか？」

ピカ「めんどくさ・・・」

汐は手にクツキーの袋を持ってピカに見せる。

ピカ「やります。」

態度をコロツと変え、弁当を持って学校へ向かう。

そして、数メートル歩いた後

ピカ「あれ、俺いい様に使われてないか。」

当たり前なこと、今さら気付いたようだ。

キリ「おなかすいた」

昼時、キリは空腹でのびていた。

「キリく、あんたの手持ちらしいのが来てるよ。」
キリの友人の少女がピカの首根っこをつかんで差し出した。

ピカ「よっ、弁当持ってきたぞ。」

キリ「ありがとう、ってどうやってここまで来たの。」

ピカ「普通に忍び込んできた。途中見つかって追いかけてまわされたから黙らせたけど。」

廊下には痺れて動けない教師がいた。

キリ「ピカちゃん、一週間お菓子抜きね。」

ピカ「えっ。」

キリ「やり過ぎだから。はあく、先生にちゃんと謝っておかないと。」

キリはため息をつき、ピカはなぜ怒られたか分かっているようだった。

夕暮れ時、ピカは一匹、近くの草むらで適当なトレーナーに喧嘩を吹っかけていた。

ピカ「強い奴いねえな。退屈で仕方がない。」

そう言っただけまた一人トレーナーをかたずける。

そこに一つ近づいてくる影が

チャモ「久しぶりだな。」

ピカ「おう、久しぶり。」

チャモ「本当に、捕まっただな。」

ピカ「納得してはいるけどな。」

チャモ「そうか、腕が鈍らないようにしておけよ。」

ピカ「わかったよ、また生きて会えることを。」

そしてピカとチャモは別れた。

クリスマス番外編（前書き）

今回はクリスマス番外編です。

クリスマス番外編

「これでお別れだ。じゃあなアル！元気で暮らせよ！クリスマスによるしくな！」

ピカ「バーニイ・・・」

ピカは『ポケットの中の戦争』を見て泣いていた。

汐「ピカさんケーキ焼きましたよ、ってまた見てるんですか、好きですね。」

ピカ「名作だからな。何度見ても泣いてしまう。貸すから見ろ。」

汐「もう何回も見てますよ。それとケーキはいらないんですか？」

ピカ「いる！！」

ピカそう言うのと台所の方に走って行った。

キラ「そういえば、ピカちゃん、私たちと出会う前クリスマスってどうしていたの？」

ピカ「ん？どうして急に？」

キラ「なんとなく気になったから。」

そこでピカは、少し間をおいて。

ピカ「クリスマスの概念は知っていたけど。それが何日かとは知らなかったからなあ。どう過ごしていたかとは一概には言えない。」

キラ「そうなんだ。」

ピカ「まあ、覚えている日のことなら話すが。」

汐「興味あります。」

ピカ「んじゃ、話すか。」

そうしてピカは語りだした。

ピカがまだ子供だった頃。

ピカ「まだやるか？」

周りの不良なポケモンたちを、木刀二本でかたずけていた。

「不意打ちは卑怯だぞ。」

ピカ「隙だらけな奴が悪い。」
鬼である。

「おぼえてろ。」

ピカ「気が向いたらな。．．．にしても弱すぎだろ。」
規格外の奴が言えるセリフではない。

ピカ「ちょうどいい暇つぶしは無いのかね。」

暇つぶしを求めてさまよいだす。

ピカ「ん？あれは．．．」

さっきコテンパンにした不良たちが新しい奴を連れてきていた。

「アニキ、あいつにやられたんです、コテンパンに仕返してください。
い。」

「おいてめえ、子分が世話になったみたいだな、少し面貸せや。」
ピカ（こんな奴まだ残ってたのか。）

もはや絶滅危惧種である。

ピカ「はあ．．．喧嘩だったらいくらでも相手をしてやるよ。」
ピカは二本の木刀を構え臨戦態勢に入った。

ピカは【電磁波】で不良の動きを止め、木刀で滅多打ちにした。
あまりにも一方的で、ただの蹂躞でしかなかった。

ピカ「喧嘩売るなら、相手との力の差を考慮しろよ。」
先に喧嘩売った奴のセリフではない。

ピカ「・・・今日はもう家に帰るか。」

ピカ「つてなことあったな。」

キリ「そんなことやってたの？」

ピカ「これくらい日常茶飯事だったけど。」

キリ・汐「・・・」

ピカは今日も平常運転だった。

クリスマス番外編（後書き）

クリスマスらしいことを全くしてないッスね。

二十五話(前書き)

ようやく本編が書けたッス。

二十五話

ピカは夢を見ていた。

見たことも無い土地、見たことも無い人々、けれど自分は出てこない、まるで”異世界”であるかのよう。

ピカ「夢か・・・」

ピカはただの夢と思い込み過ぎていた。

そして、ピカは台所へ向かった。

キリ「ピカちゃん、今日バトルフロンティア行こうか。」

ピカ「バトルフロンティア？」

キリ「そう、バトルフロンティア。さまざまルールの中で戦うところ。」

ピカ「なるほど。よし、最近暇してたし行きますか。」

バトルフロンティアのバトルステージに来ていた。

なぜなら、キリの手持ちは二匹しか居らず、その上汐はミュウなのでバトルフロンティアに参加できない。

つまり、一匹で参加するバトルステージにしか挑戦できないのである。

まあ、汐が参加できても手持ちが三匹必要だから無理なのだが。

(ファクトリー除く)

キリはステージへの挑戦申請をしていた。

キリ「バトルステージ挑戦の登録お願いします。」

「使用ポケモンと使う技、それに持ち物は。」

キリ「使用ポケモンはピカチュウ、使う技は・・・ピカちゃん何使えるの。」

トレーナーにあるまじき行為である。

ピカ「適当に【神速】【電磁波】【ボルツテカー】【エアスラッシュ】でいいんじゃないか、技は適当にやりやなんとかなるし。持ち物は、木刀はOKかどうか聞いてくれ。」

技的に本当にピカチュウかどうか疑いたくなる。

「木刀くらいならいいですけど、本当にピカチュウなんですか？」
キリ「ピカチュウですよ。」

そう言っつて、係員にピカを直接見せる。

「・・・わかりました。すぐに始まりますので控室に向かって下さい。」

そして、キリ達は控室へと向かった。

ピカ「ここで試合するのか。」

ピカは、バトルステージの舞台に立っていた。

「どのタイプに挑戦しますか？」

キリ「地面でお願いします。」

バトルステージへの挑戦が始まった。

ピカ「意外と楽なもんだな。」

ピカはドサイドンを【エアスラッシュ】一撃でかたずけていた。そして、すでにフロンティアプレーン戦まで来ていた。

「次は、ステージマドンナのケイトだ!!」

ピカ（次は骨があるやつなのかね。）

ピカがそんな失礼なことを考えていると、ケイトがやってきた。

「あなたのポケモン、今まですべて一撃で倒すなんてすごいじゃない。でも、今回も同じことができるかしらね。」

キリ「私はこの子を信じるだけです。」

「いい目ね。かかってきなさい。」

そうやってケイトは、ボスゴドラを繰り出してきた。

ピカは【ボルテッカー】で先制をとるが。

ピカ（耐えたのか。）

ボスゴドラは攻撃に耐え、そのまま【地震】を繰り出す。ピカも宙に飛んで回避するが、そのまま止めと言わんばかりにボスゴドラは【ストーンエッジ】を放った。

しかしピカは【エアスラッシュ】で【ストーンエッジ】を相殺する。そして地面に着地した瞬間に【神速】でボスゴドラを倒した。

キリ「勝ったの・・・」

キリは大分戸惑っている。まあ初めてでここまで来たのだから当たり前前なのだが。

「あなたが戸惑ってどうするの、あなたがポケモンを信じた証がこれなのよ。もつと喜びなさい。」
キラ「はいっ!!」

「おばさんが負けた時のセリフはこれでおしまい! バイバーイ!!」
ケイトはそう言って去って行った。

そして家に帰り、ピカは屋根の上でサイダーを飲んでいた。

ピカ「新月か。」

汐「新月ですね。」

ピカ「わりと唐突に現れるな。」

汐「ピカさんも人のこと言えないじゃないですか。」

ピカ「そうか?」

汐「そうですね。・・・今日バトルフロンティア行ったんでしたよね。どうでした?」

ピカ「まあ、それなりに楽しめたぞ。俺の攻撃に耐えた奴もいたしな。」

汐「そうですね。」

ピカ「あとで話してやるよ。今日はもう寝る。」

ピカが立ち上がった瞬間、空中に穴が開いた。

ピカはその穴の中に引きこまれる。

ピカ「なんなんだこれは。」

汐「ピカさん。」

汐が助けようと手を差し伸べるが、その努力もむなしく、ピカは穴に吸い込まれてしまった。

そして穴は閉じてしまった。

二十五話（後書き）

超展開

日常篇は一旦終わりッス。

二十六話(前書き)

書けたッス。

二十六話

ピカ「ここは……」

???「痛つつ……」

ピカの目の前には赤髪蒼目の少女がしりもちをついていた。

そして少女はピカを見て

???「……家事でもさせようと思って、使い魔召喚したのに何もできなさそうな小動物が出てくるなんて、儀式のおかげで夜になるし……」

ピカ「失礼な、料理以外の家事ならある程度出来るぞ。それとも、ここを火事にしてやるうか。」

夜中で眠たくイライラしているのである。それにしても大人げない。

???「……であんたは何者なの。」

ピカ「誰かに素性を聞くときは自分から名乗るのが礼儀じゃないのか。」

???「はいはい。私は、サラ、魔法使いよ。」

ピカ「俺はピカ。見ての通りピカチュウだ。」

サラ「見ての通りと言われても、あんたみたいな生き物見たことないわよ。」

ピカ「俺だつて”魔法使い”と堂々名乗るやつは初めて見たぞ。」

お互いに認識のズレが生じる。

ピカ「とりあえず、”魔法”つてなんなんだ?」

サラ「魔法も知らないなんて、あんた本当に悪魔?」

ピカ「あいにく、ただの小動物だ。ピカチュウ俺の世界には魔法なんてもの無かったよ。」

サラ「悪魔召喚したつもりだったのに、どうしてこうなったのよ。・
・まあ、いいわ。魔法つてのはこういう力よ。」
サラは手のひらに炎を灯した。

ピカ（何か、別のエネルギーを熱エネルギーにして炎を作った！！
？）

ピカは驚き、その原理を解析し始めた。

サラ「他にも障壁を作ったり、風を生み出したりと色々できるわよ。

ピカ（ある程度物質的で、さらに他のエネルギー変換しやすいのか
？）

サラ「ここまで、色々なことができるのは、ひとえに私の魔力が
多いのと、私が天才だからだけだね。」

ピカ（魔力っていうのか。他のエネルギーに変換しやすいってこと
は、他のエネルギーからも変換しやすいってことだよな。なら・・・
）

サラが天狗になっている間ピカは、自分の電気を魔力に変換し魔
法を使ってみていた。

サラ「・・・って、なんでそんなあっさり魔法を使ってるのよ。」

ピカ「原理はさっきので大体解ったからな、結局はエネルギー変換
には変わりないわけだし。（エネルギー変換しやすく、保ち続け
られるエネルギーか、割と便利だな。）」

サラ「あんた、魔法が使えるってだけで王宮で勤められるのに、そ
れを見よう見まねで、ありえないわ普通。」

規格外である本当に。

ピカ「いいじゃねえか別に。・・・じゃあ、自称”天才”のお前が
何で王宮に勤めてないんだ？」

サラ「女で才能があると、嫉まれるのよ。」

ピカ「そういうもんなのか？」

サラ「そういうもんなのよ。・・・もう眠いし、あんた抱き枕代わりにはなるわね。」

ピカ「はあ？」

サラ「最近寒いのだよ。ベッドで寝るだけありがたいと思いなさい。」

ピカ「えっ、ちょっと、放せ、一人で寝る方がいいんだよ、俺は。」

そして、異世界での夜は更けていった。

二十六話（後書き）

異世界編突入ッス。・・・本当にポケモンじゃなくなってきたッスね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8243t/>

とあるピカチュウの不殺録

2012年1月6日03時52分発行